

# 悠久の河

34

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

### 最後の言葉

「ばかなやつだ。わしは、毎日毎日、おまえが家族のことを言い出すのを待っていた。わしらは、この世でたった一組しかない父子ではないか」

彌兵衛の目には、光るものが有った。

クニが側で、泣き崩れた。今までの思いを総て吐き出すように、クニはいつまでも泣き続けた。

「お父上さま…誇りに思っ…て…おります。娘の…つるを…たのみます」

これが勘六の最期の言葉になった。

勘六の後を追うように、クニが再び帰ることのない永遠の旅に出たのは、それから間もなくのことだった。

どんなときも、彌兵衛をいつも陰から、そつと支え続けた七十二歳の生涯であった。

つるは、五郎太の迎えを断り、勘六の野辺送りにも、クニの葬儀にも参加しないままだった。大庭村へつるを迎えに行った五郎太は

「驚いて腰が抜けそうになりました。まるでゆうさまが生きておられるようでした。つるさまは美しい方でございます。それに、やさしいのに気が強いのも、ゆうさまを見ているようでございまして。ここへお連れするのも容易なことではございません」

と、彌兵衛に告げた。

失意に打ちひしがれた彌兵衛は、今度こそ意宇川の工事現場へと出掛けることはあるまいというのが、大方の村の人たちの見方だった。

けれども、それから間もなく、意宇川の工事現場からは、聞き慣れた槌音が、力強く響いてきた。



槌を振る彌兵衛の姿。利山をのりつるの娘のつるの姿

画 寺戸良信

「まさか、周藤の旦那さんではあるまいのお」  
「あれだけ不幸が続きなさったんだ。おかしくなつて当り前だ」

村人たちの心配をよそに、彌兵衛は再び、岩を削り続けた。

彌兵衛は大切な者を総て失い、失意のどん底だった。孤独な、やせ細った老骨に早春の風が染み入った。彌兵衛は、思わず身震いをすると、鑿を握り、槌を手にとった。

今の彌兵衛にとって、唯一、生きている証が得られるのが、この場所だった。

彌兵衛は、鑿を握りながら、初めて、つると出会った日のことを思い出していた。

今の彌兵衛にとって、ほのぼのとした思い出というものは、孫のつるのことしかなかった。

「こうやって、振り向いたら、手を振っているあの娘がおった」

「あの川の中に足を浸して、ほら、あの岩のところじゃ」

そう呟きながら、彌兵衛は手を休め、独り言を言いながら霞んで見える河原を見下ろした。

「あそこで…」

そう言いながら、彌兵衛は手ぬぐいで目のあたりを拭いた。

——わしは、つる恋しさのあまり、幻を見ている。しかも幻は二つになって見える。つるではなくて、ゆうと勘六か？あの世から。私を迎えに来てくれたのかな？——